

世紀の変わり目の下関、門司、そして日本

江戸時代後期から明治時代初期（1853 年-1868 年）

日本は 19 世紀後半に開国するまで、長い鎖国の歴史があった。1630 年代、徳川政権は外国貿易を厳しく制限し、国民の出国を禁止する政策を実施した。この鎖国政策は、動乱や植民地化につながりかねない外部からの影響（特にキリスト教宣教師）を防ぐためのもので、「鎖国」政策として知られるようになった。1854 年、アメリカの特使マシュー・ペリー提督（1794-1858）が海軍の分遣隊を率いて来航し、日本に開港を迫るまで、日本はほとんど孤立したままだった。

外交的合意を得るための海軍力の行使（「砲艦外交」と呼ばれた）は、他の西洋諸国にも真似された。1858 年、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスはそれぞれ、日本を侵略した側に有利な貿易・外交的特権を与える不平等条約を日本に結ばせた。これらの不平等条約は、財政と社会の不安定さの原因となった。この条約によって外国の貿易商は金やその他の資産を安く購入して日本から持ち出すことができるようになったため日本の通貨は弱体化し、また外国人は現地の法律による刑罰から守られるようになった。

外国の侵入に対する態度は複雑で、近代化を支持する派閥でさえ不平等条約には憤慨していた。革命的で排他的な感情が最も強かった藩は、長州と薩摩（それぞれ現在の山口県の一部と鹿児島県にあたる）であり、彼らの指導者は国家行政からは歴史的に締め出されていた。彼らは徳川幕府を倒し、天皇の権力を回復し、アジアを席卷していた植民地勢力に抵抗することを望んでいた。

こうした国際的緊張の中、勤王派の志士たちは「尊王攘夷」をスローガンに結集した。尊王攘夷は孝明天皇（1831-1867）の承認を得るだけで実行に移され、1863 年には勅令が發布された。長州軍はいち早く、関門海峡を通過するアメリカやヨーロッパの船に向けて発砲した。この攻撃は、西洋勢力との衝突と、徳川軍対長州・薩摩連合軍の衝突双方の火種となった。これらの戦いは、1867 年に徳川最後の将軍が退陣し、明治天皇（1852-1912）の下での新政府が樹立にまで至った。

明治期の近代化（1868 年-1889 年）

近代化を進めるにあたり、明治新政府は統治、軍事、経済のモデルを西洋に求めた。岩倉使節団（1871 年-1873 年）のような、代表者を海外に派遣して研究する渡航を後援した。政府はまた、海外の専門家を日本に招き、指導やインフラ整備の監督を行わせた。こうした努力は、西洋の技術、軍事科学、文学、音楽、食べ物、ファッションが日本に流入する文化・産業革命をもたらした。

社会の構造さえも、一連の急激な改革によって変質した。政府は江戸時代（1603～1867年）の厳格な社会階層を解体し、旧貴族、旧官僚（武士）、旧庶民の3つの階級からなる新しい制度に置き換えた。数世紀ぶりに、下層階級は自分の職業や生計を自由に選べるようになった。しかし、彼らはこの新しい社会的流動性に満足するどころか、より大きな権利と政府への発言権を求めた。これらに反対したのは、地位と収入を失ったことに憤慨した旧士族階級だった。一揆や抗議運動は全国各地で起こった。

明治政府は中央集権化された新しい軍隊を使ってこの騒乱に対処し、立憲制度を作ることによって支持を固めようとした。当時侍従長を務めていた元長州藩士の伊藤博文（1841-1909）は、海外使節団を率いて、西洋の憲法制度を研究した。1889年、プロイセン憲法をモデルにした明治憲法が施行され、制限民主制が確立された。

#### 技術的な成長と軍事征服（1877年-1945年）

日本初の内国勸業博覧会は1877年に開催され、そのわずか4年後にも開催された。工業化が本格的に始まったのは1880年代で、当初は繊維などの軽工業が中心だったが、10年後には造船、石炭採掘、鉄鋼などの重工業が登場した。

このようなプロジェクトの多くは、当初は政府所有であったが、民間企業との競争には勝てなかった。政府は1887年に長崎の造船所を三菱に売却し、1889年には大規模な民営化プロジェクトの一環として三池炭鉱を三井に売却した。これにより、日本の造船業と石炭産業は、非常に重要な民間産業として発展した。これらの産業は、日本列島に寄港する船舶にとって重要な石炭備蓄基地であり交易の中心地であった関門海峡地域の発展の鍵を握っていた。

芸術、科学、技術に加えて、海外進出もまた、日本が国民的アイデンティティに取り入れた西洋文化の特徴であった。1850年代から外国人顧問が軍事改革を手助けしていたが、明治政府は広範な改革を実施し、1880年代から学校での兵式体操を開始した。日本の軍隊はすぐに近隣諸国と肩を並べるようになった。日清戦争（1894年～1895年）と日露戦争（1904年～1905年）において、日本は近代的な陸軍と海軍を試し、アジアで最も強い2つの国を破った。関門海峡は、日本海を渡ってアジア大陸に向かう兵士たちの出発点となった。

これらの勝利により、日本は東アジアと東南アジア全域で軍事征服と帝国主義の道を歩むことになった。海外での成功で軍部が増長していくと、国内でも影響力と権力を強め、政治的暗殺を扇動し、1936年にはクーデター未遂事件まで起こした。軍部指導者の野放図な

権力と影響力は、国境をますます拡大させ、日中戦争（1937 年～1945 年）を引き起こし、やがて第二次世界大戦へとつながっていった。